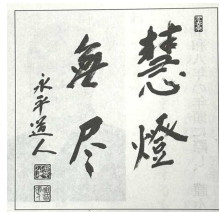




“源溪山だより”

<https://chouanji.p-kit.com/> 令和8年4月①
住職 恩田仁志 gen-chouanji@aka2.gmob.jp



◆我が燈とせよ

100回忌のご法事が続きました。亡くなられた理由はわかりません。ただし100回忌を向かえられた昭和2年2月、3月に御逝去された特にお年寄りや子どもにとっては、たいへんな一年間だったことが想像できます。それは町誌などの資料から伺えます。

特筆すべき事項は以下の通りです。

- ・7月には大雨で赤川が氾濫。
大東町は北町から住宅地浸水
- ・梅雨明け後は冷夏 ↘
- ・ウンカ大発生 → 米凶作
- ・12月から大雪

ご法事の中で、塔婆裏文の禅語(花従花裏過來香)に併せ、次のことばを引用しました。

存在していたものすべては
永遠に生き続ける

アガサ・クリスティ

100回忌のご法事は4代あるいは5代ほど前の世代様であることが多かったです。

もちろんご法事に参列した人は、子どもも大人も故人に直接会った人はいませんでしたが、その方がこの世に存在していなかったとしたら今の自分という存在が無いと言うことは、小学生でも理解できました。

存在していた命が、自分の中に生きているということ です。



ただ、命がつながっていることには留まりません。川の氾濫という事実からは、その後になって河川改修や護岸整備につながり、冷夏やウンカ禍からは、品種改良や農薬、肥料の開発などにつながっていたと考えることができます。

人の命だけで無く、事物、文化なども、存在していたものは形を変えて後世へと生き続けています。

前号で長安寺が曹洞宗となって555年の歴史を重ねて来たことを紹介しました。生き続けてきたのは、もちろん数えられるような半端なものではありません。

今月の塔婆裏文は「^{えとうむじん}慧燈無尽」。本年々頭にあたり曹洞宗管長様が示された言葉です。

慧燈とは、お釈迦様が点された智慧の^{ともしび}燈のこと。その教えの燈が尽きること無く時を超え空間を超えて、さらに世界のすみずみまで行きわたりますようにと願い、次のように示されています。

「……。今が昏迷深き世なればこそ、皆が仏法を履踐し、仏祖受け継ぎ点されて来たった慧燈を我が燈とし、世に光明をもたらすことを諦めてはならないのです。……。」と。

生き続けてきた教えを私たちの燈として、正しい道を進んでいかねばなりませんね。

